

tryàṅgula- のアクセント

松浦 高志

tryàṅgula- 「三本指の幅をもつ」 (ŚB I.2.5.9) という形容詞は前分がアクセントをもつ (< tri-āṅgula-). 一般に Bahuvrīhi 複合語は前分がアクセントをもつが, tri- などが前分になっているとき, tri-nābhi 「三つのへそをもつ」のように後分がアクセントをもつのがふつうである¹.

これは, tryàṅgula- が, 複合物を表す複合語 (Komplexivkompositum) から二次的に派生した Bahuvrīhi 複合語であると考えれば説明できると Karl Hoffmann は指摘した². Hoffmann は次のように説明している. まず, 複合物を表す複合語 (中性名詞) には次のような例がある (アクセントは最後の音節) : tri-divám 「三つの天から成る複合物」 (: div-), ṣaḍ-gavám 「六頭の牛から成るもの」 (: gó-), caṣṣ-pathám 「十字路」 (: pánth-). このような複合物を表す複合語からは, さらに二次的に a 語幹の Bahuvrīhi 複合語がつくられる (アクセントは前分) : śatá-śāradam 「百の秋から成る複合物 (= 人生)」 (RV X.161.2), śatá-śārada- 「百の秋から成る複合物, すなわち人生をもつ (「百の秋をもつ」ではなく)」 (ibid.). したがって bahv-ṛcāḥ (ŚB) は 「たくさんの ṛc 詩節の複合物 (つまり『リグ・ヴェーダ』) をもつ人々」を意味するが, これは ṣaḍ-ṛcám 「ṛc 詩節の六詩節」のような複合物を表す

¹ VGS, Appendix III §10.c.α (p. 455).

² Hoffmann, “úraṇ-”.

複合語（中性名詞）からつくられたものと考えられる。

したがって *tryàṅgula-* は、文字通りには「三本の指から成る複合物をもつ」を意味することになる。Hoffmann は *dvy-ùraṇa-* (ŚB XI.5.1.2) について、**dvy-uraṇam* という複合物を表す複合語を（存在はしないが）まず想定し、それから派生した Bahuvrīhi 複合語がこれであると考え、*ávir dvy-ùraṇā* を「一腹に二頭の子羊を宿している羊」を意味するものと考えている³。

凡例

(:A) A は語根.

*B B は想定形.

C < D C は D に由来.

VGS Macdonell, *Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献の略号

RV Ṛgveda(-Saṃhitā).

ŚB Śatapatha-Brāhmaṇa.

参考文献

Hoffmann, K., “Ved. *úraṇ-* ‘Lamm’”, in: *Aufsätze zur Indoiranistik*, Band 2, hrsg. Johanna Narten (Wiesbaden: Reichert, 1976), 356–357.

Macdonell, A. A., *A Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).

³ 本ノートは 2022 年 12 月 5 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 IV」（東京大学文学部）での発表資料をほぼそのまま掲載したものである。